

ノーベル賞受賞者たちが大切だと思っていること

研究開発部 矢口みどり

ノーベル賞を誰かが受賞すると、人々の関心事は、未来のノーベル賞受賞者を育てるための教育はどうあるべきかというところに向かう。そして受賞者たちに、それを問う。それに対する受賞者たちの答えを並べてみると、驚くほど共通したものが見えてくる。

《 2008 年ノーベル賞受賞者 》

南部陽一郎さん「私の仕事は未解決の問題を解くこと。死ぬまで続けたい。」

益川敏英さん「自然の中で起こっていることは必ず、自然の中にその理由が有る。神様が作っているわけではなく、自然の中に答えが有るのだから、きちっと調べていけば答えに到達できる」(子どもたちにメッセージをと請われて)

小林誠さん「法則があって、その帰結を求めるのではなく、法則そのものを見つけること」「自分が想像したことを実験でチェックし、矛盾の有無を確かめ、パズルを解いていくやりとりが面白い。想像力の限界を試されている感じ」(素粒子論の醍醐味について)

下村脩さん「子どもにはどんどん興味をつのらせてあげなさい。興味があるうちにやらせなさい。そして子どもがやり始めたらやめさせてはだめです。」(新聞の取材に答えて)

《 2002 年ノーベル賞受賞者 》

小柴昌俊さん「本当に自分が興味をもち、心から面白いと思えるものなら、困難にぶつかっても、あきらめなくて続けられる。本気で取り組める。その分、自然と道も開けていくものだ。」「常になぜだろう、どうなっているんだろう、という好奇心の目で、ものごとを見るのが大切」「不思議に思ったことは、すぐに調べたり、実験をしたり・・・自分の頭で考え、調べるのが大切」「研究現場や実社会では、自分で問題を見つけ、どう処理するかを考え、自ら行動する、能動的な認識能力が必要」(講演で)

田中耕一さん「失敗を失敗と片づけず、なぜそうなったかを考えることが必要だと思う。自分の失敗を振り返るのは嫌なものだが、それをたどることが成功につながるかもしれないし、隠れたものの発見には必ず役立つと思う。」(座談会で)

「自分の頭で考え、自分の足で歩き、自分の手で作ることは、今でも、どんな進歩した未来でも同じ事だ。ぼくの考え、ぼくの思いは、いつまでもぼくのものでありたい。」(4年生のときの作文で)

《 2000 年ノーベル賞受賞者 》

白川秀樹さん「自然に親しみ、本物を見て、自然の不思議と遊ぶこと。」子どものころは別に秀才だったわけではなく、野山を走り回ったり川で泳いだりして遊んでいた白川さん。そういう生活の中で、小さな発見、小さな疑問に出会い、それが理科への興味につながっていったという。

彼らをその道に招きいれ、ノーベル賞にまで導いたもの、それは「なぜだろうと思う心」と「探究的行動力」である。

JADEC ニュース 76 号(2008.11) 加筆修正

能力開発工学センター “JADEC の目”